

めでいかすとり
Médicastre



「みずばしょう夏祭りの花火」

鶴岡地区医師会

24年 **8**月号

期 日：平成 24 年 7 月 27 日 (金)
場 所：東京第一ホテル鶴岡

病院勤務医と医師会との懇談会

勤務医委員会 石 原 良

今年で 6 回目となる病院勤務医と医師会との懇談会が 7 月 27 日に東京第一ホテル鶴岡で開催されました。出席者は病院勤務医 14 名（荘内病院 11 名、協立病院 3 名）医師会 19 名の計 33 名でした。

三原一郎会長の挨拶の後、話題提供 3 演題の発表がありました。最初は荘内病院呼吸器外科主任医長正岡俊明先生に呼吸器外科の診療の中で特に肺癌の診断と治療についてお話して頂きました。レントゲンで写らない小さな腫瘍やすりガラス状の腫瘍に対する診断、治療方法、胸腔鏡による低侵襲の手術などについての発表でした。次いで荘内病院内科主任医長安宅謙先生には腎臓内科の役割や現況についてお話して頂きました。荘内病院の透析患者の現状や慢性腎臓病（CKD）の診療連携でどのようなタイミングで病院に紹介したら良いかなどの発表でした。最後は石橋内科胃腸科医院石橋学先生に平成 23 年に荘内病院へ紹介した患者さんの概要と転帰についてお話して頂きました。紹介した患者さんは高齢者が多く、約 8 割の患者さんが入院になっているとのことでした。

その後荘内病院三科武院長の乾杯で懇親会が和やかに行われ、最後は鶴岡地区医師会三浦二三夫議長の中締めで閉会となりました。今回は荘内病院の行事と重なり、病院勤務医の出席が昨年より少なくなりました。また、6 回目の開催となり、開催形式など再考する必要があるように感じました。会員の皆様にはご意見、ご要望などお寄せ頂ければと思います。



ニューカレドニア (nouvelle caledonie) 旅行記

鶴岡市立荘内病院小児科 伊藤 末志



7 月始めに 1 週間ほどの日程でフランス領ニューカレドニアへ旅行してきました。同国への日本人移民 120 周年祭への参加と、鶴岡市との友好都市盟約を交わしているラフォア市との友好の輪を広げる目的がありましたが、実際は鶴岡・ラフォア友好協会会長をしている同級生に誘われたためです。その歴史的な背景をほとんど勉強もせず、親善使節団（団長は鶴岡市長）の一員として参加してきました。

今から 40 年以上も前に書かれた、ニューカレドニアを舞台にした「天国に一番近い島」という森村桂の小説があります。その後、原田知世主演で映画化されましたが、それももう 30 年近く前になります。地球のはずれに天国に一番近い島があり、そこはいつもキラキラ輝いていると聞かされていた森村桂の実体験を小説にしたものですが、キラキラ輝いていたのはニッケルで、今でもニューカレドニアの本島（グランドテール島）のどこを掘ってもニッケルが出ると言われているほどです。その生産量は世界第三位であり、埋蔵量は世界一ということですのでフランスが手放すはずがありません。日本人移民はこのニッケル鉱山での大きな労働力になってきたようです。

真夏の日本から南へ約 7,000km。南半球に位置しますので真冬に近い季節でしたがほぼ半袖で過ごせました。細長いフランスパンのような形をした本島を中心に大小の島々からなり、その

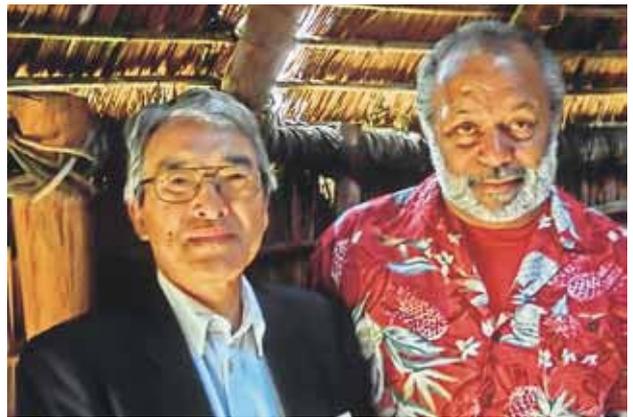
美しさは、目にした人ならだれでもしばらくは言葉を忘れるほどといわれており、2008 年にはユネスコ世界遺産にも登録されました。同行した団員の中には 10 回以上や 8 回目などの渡航歴を持つリピーターもあり、その理由も探りたいと思いました。帰国後も、サンゴ礁に囲まれたエメラルドグリーン的大海と純白のパウダーサンドが織りなすコントラストが目について離れなくなっていますので、これも理由の一つでしょう。

成田を夜に出発し、翌日の朝に島の南部で西岸にある国際空港に到着。バスで東岸にあるティオ市に移動。そこで日本人慰霊碑の定礎および仏教式とカトリック式でセレモニーが行われました。セレモニーではニッケル原石を前に日本の文化をお披露目する催しもありました。移動中のバスからの風景や墓地から見渡す山々にはニッケルが採掘された赤土の山肌が少なからず見られましたが、現在は、採掘後は必ず植樹をしているそうです。この日の夜はラフォアセレモニーホールで歓迎レセプションがあり、先住民の迫力あるダンスに圧倒されました。翌朝はラフォア市役所で歓迎セレモニーがあり、市役所敷地内に造られている鶴岡・ラフォア友好協会初代会長の故生田謹吾氏のメモリアルガーデンで顕彰碑の除幕式などが行われました。その後、出羽庄内国際村敷地内のカズ（儀礼の館）を寄贈してくれた先住民族のワトム部



地元の若者による歓迎ダンス

族を訪問、昼食をいただきましたが、カズの内部ではとても厳粛な気持ちになりました。午後にはタクシーボートで無人島（コンドヨー島）に渡り、裸足でパウダーサンドを踏みしめ島を一周しました。この日の夜は、我々が宿泊しているホテルでラフォア市民に対する答礼夕食会が催されました。3,000メートル級の山々に囲まれたところに位置するホテルであり、私の部屋には写真のような訪問者がありました。



カズの中で部族長さんと



ラフォア市役所前での歓迎セレモニー



私の部屋への訪問者



顕彰碑の除幕式

翌日からの 2 日間は、ヌメア市で日本文化フェスティバルへ参加。鶴岡では一度も経験のない天神祭の「おばけ」の衣装を着せていただき、来場者に鶴岡の酒を振る舞うのが私の務めでした。フランス人には酒の味はすこぶる好評でした。女性群は花笠踊りと、御殿まりつくりの指導に当たりました。羽黒山伏の中野氏によるほら貝と龍笛による演奏が脚光をあび、フェスティバルの中では一番もてていたようです。



市役所内の議会場、中央がラフォア市長、左が鶴岡市長、右が鶴岡市議会議長



三人のおばけ



地元の新聞に掲載された中野氏

以上のように、セレモニー、フェスティバル参加と息つく暇もないほどでしたが、行程の最終日だけは観光（オブショナルツアー）が組まれており、私は一度は見ておいた方が良くと勧められた海の宝石箱と呼ばれている「イルデパン島」への日帰りコースを選びました。ニューカレドニアでは一番南極に近い島で、シュノーケリングのメッカとしても知られています。そのつもりで海水パンツを穿いていったのですが天候が優れず、海辺での昼寝になってしまいました。また、朝には空路20分で着いた国内線のプロペラ機が、そのまま故障で動けなくなり、帰路はフェリーで3時間かけてやっとの思いで帰ってきました。

色々なことを経験できた旅行でしたが、来年は夏の始めにあたる11月に行こうと思っています。今年は、例年7月始めに開催される加茂水族館での「クラゲマイスター養成講座」に出席できなかったのが、副館長からはニューカレドニアのクラゲ事情調査を頼まれました。下準備はしてきました。次回の夏のニューカレドニアに期待しましょう。

今回参加した29名の団員（うち、5人が同級生）のみなさんには大変お世話になりました。紙面を借りて心から感謝申し上げます。また、飲み過ぎによる高血圧、高い灯台の昇降による狭心症様症状、おまけに帰りの飛行機内での呼び出しなど、相談に応じた場面もあり、少しは医師としての役目も果たしたのかなと思っています。来年は11月に予定しています。皆様も鶴岡・ラフォア友好協会会員になりましょう。私もリピーターになりそうです。



寒かった7月のイルデパン島、後方に見えるのが楯島(くしじま)



点在する島の守り神



イルデパン島からのフェリー



キラキラ輝くニッケルの原石



期 日：平成 24 年 7 月 28 日(出)

場 所：介護老人保健施設みずばしょう

みずばしょう夏祭り

平成 24 年 7 月 28 日(出)、夏の恒例行事として第 8 回みずばしょう夏祭り、テーマ「笑顔」を開催いたしました。心配していた天候にも恵まれ、ご利用者様、ご家族様、地域住民の皆様と大勢の方々からご参加をいただき盛大に開催することができました。

午後 6 時、上野管理医師による開会の挨拶で始まり、子供太鼓クラブによる太鼓、柏樹会の踊り、佐藤由紀子さんによる美しいシャンソン、念珠関弁天太鼓創成会の力強い演奏を披露していただきました。職員もダンス、太鼓、影絵を披露させていただき、屋台では、焼き鳥、ラーメン、玉こんにゃく、焼きそば、チョコバナナ、各種飲み物等盛り沢山の品々を用意させていただきました。当日券も予想以上に売れ行きが良く、中には行列の出来る屋台もあり大変好評でした。

最後は、いい風にも恵まれ、みずばしょう夏祭り恒例の花火を打ち上げました。ご協賛いただきました医師会会員の先生方、事業所の皆様、職員の方々に改めて御礼申し上げます。また、医師会他事業所の職員からもお手伝いいただき、大盛況のうちに終了することができました事を心から感謝いたします。

介護老人保健施設 みずばしょう 事務長 若木 敬一



特別寄稿

地霊の生みし人々(7) - 佐藤藤佐 (下) -

黒羽根整形外科 黒羽根 洋司

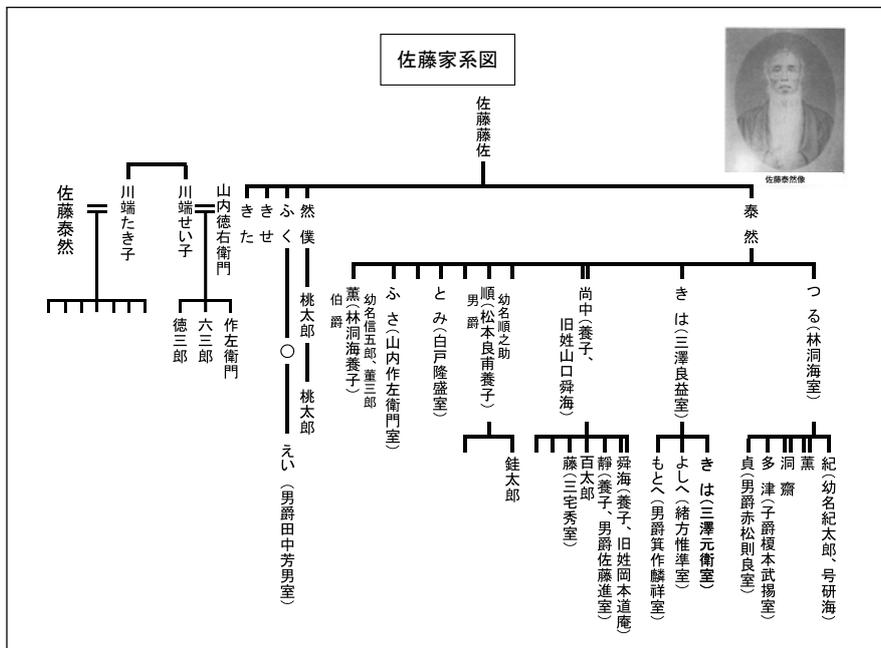
三方国替えの騒動がもち上がったとき、佐藤藤佐はすでに晩年とっていい。天下の老中水野忠邦を相手にまわして幕命を打ち砕くということに、彼は痛烈な昂揚を感じたに違いない。それは、一介の百姓あがりの策士が築き上げてきた実績と、幕閣に裏面工作をすればかならず成功するという辣腕の伝説をかかげて、歴史に名を刻もうとする一大事業であった。同時に、若くして苛酷な身分社会に放り出され、功成し遂げた人間がたどり着いた心境でもあった。「これが最後のご奉公、故郷のために一肌を脱がねばなるまい」、藤佐はそう自分に言い聞かせたはずである。

佐藤藤佐という稀有な男の最晩年を語る前に、偉大さを補完するためにも、彼の遺伝子が残した優れた群像を点描してみたい。

順天堂の創設者、佐藤泰然

その道の志願者の中で「蘭方医学を学ぶなら佐倉へゆけ」ということが常識になるほどに隆盛を極めた医学塾「順天堂」を創ったのが、藤佐の長男泰然である。父のあとを継ぐべく伊奈家に奉公した泰然だが、やがて医学の道への志やみがたく、蘭学者の足立長雋の門をたたく。次男、順之助（後の順）の養父となる松本良甫とはこの時に知り合い、終生の友となる。時に泰然 27 歳、時代感覚からすれば晩学である。その後、思い切って伊奈家を辞し、長崎にやってきたのは天保 6（1835）年で、32 歳のときであった。

泰然はどういう伝手があったのか、大通詞末永甚左衛門について蘭語を学び、ついにはその



佐藤家系図

家に住み込んだ。さらに運がいいことに当時の蘭館長のニーマンに会い、好かれて弟子のようになり、蘭語を学んだ。このあたりの行動の小気味よさと、人との出会いの妙味は父藤佐ゆずりである。

「豊肥、牛ノ如シ」といわれたニーマンから得た、泰然の学殖、技術は当時としては最先端、第一級のものであった。順天堂の看板とも言うべき西洋式外科手術も、どうやらこの当時数人いた蘭館付きのオランダ医師に学んだらしい。その点において、稀有の幸運であったが、泰然は生涯その名を明かさなかった。国法に触れる行為であったからである。

佐賀藩医大石良逸にも学んだ泰然は、3 年後江戸に帰り、薬研堀に蘭学塾を開業した。35 歳の時である。とりわけ外科では、長崎帰りの技倆を発揮し、最新の治療法を行ったため、その評判は江戸市中に広まった。

それを聞いた佐倉藩主堀田正睦の強い要請を受け、天保 14（1843）年佐倉に移住し、「順天堂」という医学塾と病院を開設した。当時屋敷

は千八百坪で普請では佐倉一であったという。江戸城の茶坊主あたりのあいだで、「西洋堀田」というあだなをつけられたほどの開明家の理解と支援があったから成しえたことであった。

泰然が佐倉藩の藩医と順天堂とを弟子の舜海（旧姓山口）にゆずり、隠居したのは55歳のことであった。のち佐藤舜海がボンペに就学するために長崎に滞留した期間中に再び禄仕したりしたが、舜海が佐倉に帰ると、いっさいを彼に譲っただけでなく、佐倉城下を去り、新興都市の横浜に移住してしまった。

こうした泰然のあゆみをたどれば、旗本の用人から中年で蘭方医になったように、つねに現在の境遇にあきたらず、新奇を好む性格がわかる。さらに物欲や名誉欲の薄い性格は、身一つで生きることをあたりまえにさせてきた。佐藤泰然の生涯は漂泊と言ってもいい。

あとに続く者たち

物が溜まると人にくれてやる泰然は、薬研堀の医院を後輩の林洞海にくれてやり、藩医と順天堂を弟子の舜海にゆずった。そればかりか、実子もどどんひとにくれてやり、長男の惣三郎を友人の山村氏へ、次男の順之助はおなじく友人の松本氏へやり、5男の董たけすは林氏にやった。それぞれに、佐藤家姓を名乗らせず、おのれの家系を祀るといまつう儒教的義務から解放させた。この時代の人物としては、その点でも驚嘆に値する。

幼名順之助、のち良順、さらに改めて松本順は、日本最初の陸軍軍医総監、貴族院議員を経て男爵となる。末子董は幕府侍医ののち、駐英公使として日英同盟を結び、外務、逓信大臣を歴任し伯爵に叙される。

順天堂を相続する舜海は泰然の秘蔵弟子にして養子、のち尚中と称し卓越した外科技術は順天堂の名声を大いに高める。佐倉順天堂を養子道庵（二代目舜海と改名）に託した尚中は湯島に順天堂医学塾を開設、これが後に順天堂大学の医学部へと発展した。

尚中はさらに、佐藤進を養子とする。進はベルリン大学へ留学し、日本で初の医学博士となり、順天堂大学を後継する。後に陸軍軍医総監



佐藤藤佐の肖像

となり、男爵となる。進の妻志津（二代目舜海の娘）は女子美術大学学長を務め叙勲される。

その他泰然の孫娘たちは、榎本武揚、箕作麟祥など医学界のみならず、明治国家建設のために貢献した人々に嫁している。

ふたたび佐藤藤佐について

佐藤泰然は子の良順に父の藤佐を引き合ひいいに出して妙な訓戒をたれていたという。「祖父様は千万人に一人という格別な方だ。ただの人間が真似ればとんでもないことになる」と。そして良順は苦境にあると「藤助大明神」と念じて、気持ちを落ち着かせたという。

74歳で死んだ藤佐だが、一枚の写真が穏やかな最晩年を伝える。律義な正座姿には、老いながらも利かん気がただよう。風貌は修羅場をくぐり抜けた男の翳はみじんもなく、むしろ愛嬌すらたたえている。しかし、広い額は知恵の塊のようであり、好ましいずるさがある。そして何よりも、風姿そのものに、武士道などとは別の規範、侠気で生きてきた「男」の一生がある。

順天とは「天に従う」の意、佐藤藤佐は奔放に生きながらも天に従い、その遺伝子は見事な大輪の花として結実した。

文献

1. 胡蝶の夢 司馬遼太郎 新潮文庫 1983年
2. 蘭醫佐藤泰然 村上一郎 房総郷土研究会 1941年

表 紙

「みずばしょう夏祭りの花火」

齋 藤 慎

7/28に好天のもと、第8回みずばしょう夏祭りが開催されました。ラーメン・焼き鳥・枝豆等々沢山の出店がありました。入居者はもちろん、近郷近在の老若男女が集まってくれました。職員の皆さんは汗だくで対応に追われていました。地元の子供たちの組太鼓やシャンソンの独唱、そして職員による影絵ショーや組太鼓の発表は見ものでした。シメは恒例になった大花火大会で終了となりました。

(この写真はHDR処理されています)

編 集 後 記

うっとうしい梅雨が明けたと思ったら今度はうだるような猛暑、天気にも文句を言っても仕方ないとかわかっていてもつい愚痴をこぼしたくなる毎日です。恒例となった病院勤務医と医師会の懇談会はわずか30人ほどの参加でした。地域連携の視点からは「ためになる」学習と懇親の場なのですが時期や内容、アナウンスなど石原先生が言われるように開催形式を見直す時期に来ていると感じました。表紙は齋藤慎先生の「花火」です。みずばしょう夏祭りはすっかり地元の行事として定着しました。在宅で療養されている方の車椅子での参加も多いと聞いています。準備にかかわった関係者の御努力に敬意を表します。

第3回となった旅行記は伊藤末志先生の鶴岡市と友好都市盟約をかわすラフォア（南太平洋に浮かぶ旧フランス領ニューカレドニア）は、常夏の楽園です。ダイビングでもとても有名な島です。フランス領で食事もおいしいと聞いています。私も友好協会の会員になって必ず行こうと決意しました。会員の皆さまもたくさんの思い出の旅行を経験の事と思います。マイペットシリーズの様にこのシリーズも一人でも多くの方の投稿を期待しております。是非旅のお供にカメラをお忘れなく。

黒羽根先生のシリーズは今回よりカラーとなり、ますます筆致が冴えわたっております。先日私は先生から「夜は文章を書くな」という名言をいただきました。先生はきっと早起きをされ散歩などで構想やひらめきがあり朝の時間を有効に利用されているのでしょう。みなさん、体調管理を万全にこの暑い夏を存分に楽しみましょう。

(中村 秀幸)

編集委員：伊藤 茂彦・福原 晶子・石原 良・中村 秀幸・齋藤 高志・今立 明宏

発行所：社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail ishikai@tsuruoka-med.jp

URL <http://www.tsuruoka-med.jp>